

國學院大學学術情報リポジトリ

土器集積に関する覚書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001966

土器集積に関する覚書

田 中 大 輔

要旨

近年、注目されている祭祀遺構として土器集積が挙げられる。土器集積は主に古墳時代の遺跡から検出される祭祀遺構であるが、これまで、関東地方を中心とした東日本での報告例が多く、東日本的な祭祀遺構とのイメージが強かった。しかし、最近、関東に限らず、列島各地での報告例が増えている。また、現状で愛媛県、和歌山県、奈良県などで、弥生時代後期にまで遡る事例が認められることから、系譜の問題について再考する必要がある。

さらに、管見の限り、土器集積は弥生時代後期から古墳時代終末期までの長期間にわたり、列島各地で確認できる祭祀遺構であるにも関わらず、体系的な研究が進んでいないのが現状である。言うまでもなく、古墳時代は我が国固有の信仰である、「神道」の形成において画期となった時代であり、当代における特徴的な祭祀遺構の研究が進んでいないのは、古墳時代および、神道の形成を考察する上で問題である。よって、土器集積に関する編年的、分布的、機能的研究を進めていく必要がある。

なお、葬送のマツリで使用された古墳出土の土器においても、土器の組成や、その出土状態などにおいて、土器集積に類似した事例が確認できた。一例を挙げれば、須恵器大甕をマツリ場で重視することは、葬送のマツリ、土器集積とも共通している。従来、神マツリと葬送のマツリは個別に研究されることが多かったが、今後は両者一体となった研究が肝要である。

キーワード

土器集積，神マツリ，葬送のマツリ，神観念，須恵器大甕

1. 土器集積とは

近年注目されている祭祀遺構として、器物集積遺構（洞口 1998）、遺物集積遺構（内山 2005）、土器集積（神谷 1998）などと呼ばれているものがある（小論では土器集積とする）。これは、主に古墳時代の遺跡で確認される。

土器集積とは、その名が示すように完形、破損品、破片を問わず、土器がまとまって出土することを特徴の一つとする「遺構」であるが、それに加えて、以下に挙げる特徴から、単なる廃棄行為の結果、残された土器群ではなく、祭祀行為の結果、残された土器群として考えられている。つまり、以下に挙げる土器集積の特徴が、そのまま同時に土器集積（＝祭祀遺構）の認定条件となる。

なお、土器集積の特徴（＝認定条件）を述べる前に注意したい点がある。それは、埋納状態にあった土器群や、建物内部から出土する土器群などは土器集積に含めないことである。つまり、遺構の形成された当時において、目視可能な状態で、かつ外部に残された土器群であることが、土器集積と認定する

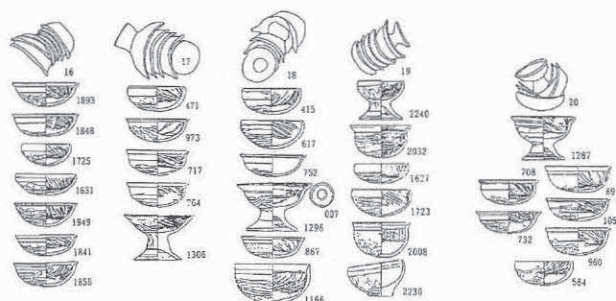


図1 下芝天神遺跡

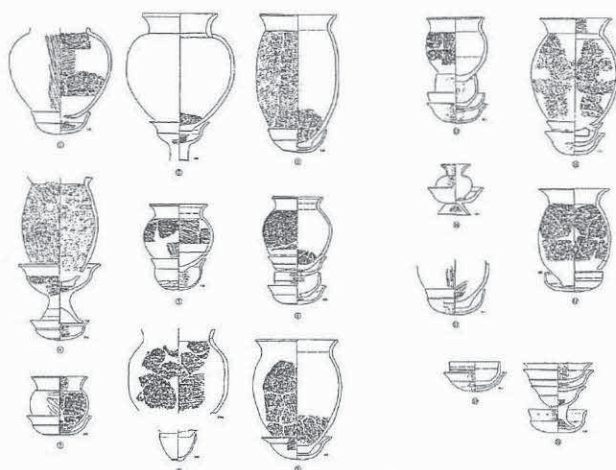


図2 野付遺跡

際の大前提となる（平岩 1996ab）。

さて、土器集積の第1点目の特徴として、単に土器がまとまって出土するのみではなく、土器の出土状態に一定の規則性が認められるか、規則性が無くとも、土器が丁寧に並べられていたり、土器が「特異・特殊」な形で重ねられたりしている状態が確認できるなど（図1・図2）、そこに、単なる廃棄行為ではない、何かしらの意図をもった、人為的な土器の集積行為の結果、遺構の形成されたことが窺えることが挙げられる。

なお、規則性のある出土状況とは、器種ごとにより、出土位置が異なっていたり、集積されている土器群の平面形が、円形や弧状などを呈していたりするなど、そこに何かしらの意味を意識していたことが窺われるものを指す。

第2点目の特徴として、集落と集落外との境界付近や、集落の縁辺で眺望が開ける地点など、居住空間と一定の距離を置いた場所から検出される事例が多いことが挙げられる（鶴間 2007）。

第3点目の特徴として、鉄製・石製・土製模造品や、手捏土器などの祭祀専用器具⁽¹⁾をはじめとして、玉類、鉄製品などを共伴する事例の多いことが挙げられる。

第4点目の特徴として、集積されている土器の幾つかに、穿孔や意図的な破壊行為が認められる個体が存在することが挙げられる。

以上の点が土器集積の特徴であり、つまりは認定条件である。

ところで、考古学の世界では、「特異・特殊」な状態で遺物が出土したり、外部世界との境界である峠や岬など、いわば「非日常」的とされる場所から遺物や遺構が確認されたりした場合、それらが残された背景として祭祀・儀礼行為の姿を復元・想定することが一般的である。

よって、土器が単にまとまって出土するのみではなく、出土した土器群に、上記したような特徴が認められれば、それら土器群を単なる廃棄遺構として捉えることは難しく、可能性の一つとして、祭祀遺構として捉えることは、あながち的外れなことではあるまい。

以上までのことを勘案して、土器集積の認定条件を再度まとめると①遺構の形成された当時において、目視可能な状態で、かつ外部に残された土器群

であること、②土器の出土状態に規則性や、「特異・特殊」性などが確認でき、そこに、単なる廃棄行為ではない、何かしらの意図をもった、人為的な土器の集積行為が窺えること、③集落縁辺部など、居住空間と一定の距離を置いた場所から検出されること、④祭祀専用器具をはじめとした、各種器物を伴うこと、⑤集積されている土器の幾つかに、穿孔・破壊など、何かしらの二次的な加工が認められること、の5点が挙げられる。その中でもまず重要な点は①、②であり、③以下は全て揃わなければならないというわけではない。

それは①～③の要素を持つ土器群が検出されても、④の要素を伴わない事例もあれば、逆に、①・②・④の要素を持つ土器群であっても、③の要素を持たない事例も確認できるからである。

よって、①・②の要素をベースに、③以下の要素が1点でも確認できれば、土器集積（＝祭祀遺構）として捉えておきたい。加えて、仮に①・②の要素しか確認できなくても、①・②+③以下の要素を持つ土器群と、土器のあり方が類似していれば、ひとはまず土器集積として認めておく。

上記の点に関連して、土器集積はその名の通り、複数の土器を中心とした器物から構成される遺構であるが、何点以上の土器の集積行為をもって、土器集積とするのかという点については、今の所明確な回答は持ち合わせていない。現時点では2点以上からとしておく。

さらに、土器集積の認定条件の一つとして挙げた、「土器の出土状態に規則性や、「特異・特殊」性が窺える」という表現については、甚だ抽象的なものであり、万人の評価を得られるものではない。今後具体的に、その内容を示していく必要があるが、今回は、第3章において採り上げる、筆者の視点に基づいて認定した土器集積の事例の紹介でもって代えさせていただきたい。

なお、完形の土器ではなく、破片が集積された結果、形成された遺構であっても、遺構が集落縁辺部から検出されたり、祭祀専用器具が共伴していたり、さらに、破片の集積が長期間にわたって行なわれていたことなどが確認できれば、土器集積として捉える。特に、別地点で破碎された土器の破片が集積されてきた遺構であれば、その蓋然性は高まる（平

岩 1996a)。

また、土坑内出土の土器群であっても、土坑内にある土器が、完全に埋納された状態ではなく、その状況が露出していたと考えられるものや、土坑の上面を越えた状態で土器が集積されているものなど、先に挙げた土器集積の認定条件のうち、少なくとも②の要素を持つものについては、地表面に残された土器集積と同義のものとして捉える(平岩 1996b)。

ところで、古墳出土の土器については、先述した認定条件を満たしていても、現時点で土器集積と同列扱いはしない。これは、「葬と祭」の問題とも関わるからであり、ひとまずは区別して考える。

しかし、古墳の墳頂部や、造出上、周溝内から、葬送儀礼の際使用されたと思われる土器が出土することは普遍的である。土器が主体となり構成されている祭祀遺構である、土器集積を考える上で、古墳出土の土器(群)との比較検討作業が重要となってくるのは言うまでもない。よって、小論でも古墳の事例も採り上げる。両者を比較検討することにより、土器集積のみならず、葬送儀礼に関する知見も深まるものと思われる。

また、今回、検討対象とする事例の時代は、弥生時代および古墳時代とし、他の時代のものについては検討外とする。

さて、以上に見てきたように、土器集積は祭祀遺構として想定できるのであるが、土器集積は、マツリ当初に形成されたものか、もしくは、マツリ終了後に、マツリに使用した土器をはじめとした器物を

集積して形成されたものか、そのいずれかのパターンが考えられる。小論ではマツリの内容や、遺構の形成過程にまで踏み込んだ考察はできないが、どちらにしても、マツリが終了した後も、可視の状態で、集積状態にある土器群が外部に残されていたことでは変わりはない。そして、既述したが、その点が土器集積の性格を考える際に重要となる。

以上、煩雑となったが、土器集積に関して前提となる部分を述べてきた。

以下に、前稿の内容と一部重複するが(拙稿 2008a)、まず、土器集積に関する研究史を概観した後、事例の紹介・検討を行なう中で、土器集積研究に関する課題と展望、及び、祭祀研究における土器集積の意義などについて僭越ながら述べてみたい。

2. 研究略史

土器集積に関する研究史の概略を述べる。土器集積における初期の報告例の一つとして、静岡県日詰遺跡が挙げられる(鈴木 1978ab)。調査者の鈴木敏弘氏は、同遺跡から検出された土器群(土器集積)を祭祀遺構として捉え(図3)、集落外祭祀のみならず、集落内における祭祀遺構に対する研究も重視する必要があることを指摘した(鈴木 1978ab・1981、1991)。

その後、土器集積に関する研究は、埼玉県城北遺跡(山川 1995)、群馬県下芝天神遺跡(洞口ほか 1998)、千葉県南羽鳥中岫第1遺跡(高橋誠ほか 1998)など、幾つかの調査報告書内で、優れたものが認められる。

特に、城北遺跡の報告者である山川守男氏は、小論でいう土器集積を「土器集積型祭祀跡」と呼称し(山川 1995・図4)、示唆に富む分析・考察を行なわれている。

最近報告書が刊行され、注目できる遺跡としては、青木下遺跡Ⅱが挙げられる(助川 2007)。同遺跡では、地点を変えつつも、集落と水田に挟まれた自然堤防の末端部において、6世紀初頭(古墳時代後期前半)から7世紀前半(古墳時代終末期前半)までの約100年の間に残された、土器集積跡が21基検出されている。

特に注目できる遺構は、Ut5と称される遺構であり、土師器杯を中心に、土師器壺、須恵器甕など、

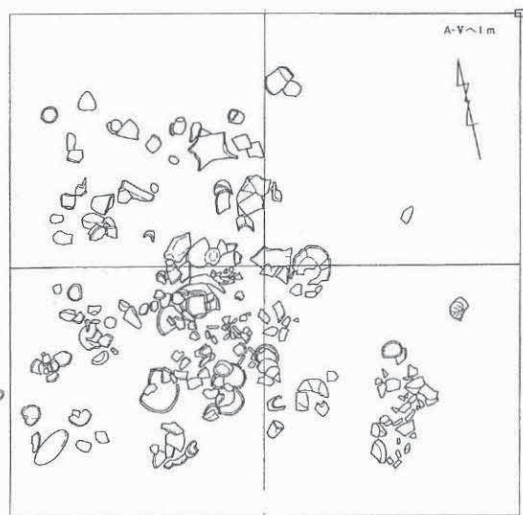


図3 日詰遺跡 (S = 1/30)

計 300 点以上の土器類が環状に集積されていた。さらに、環内中心から、やや北西部の箇所、器高約 90cm の須恵器大甕が出土している(図 5)。他に白玉、鉄製鋤先、鉄鏟、鉄製刀子などが共伴する。

さて、土器集積の研究は個別事例の報告で優れた

ものはあっても、体系的な研究は未だ少ないのが現状である。そのような中で、精力的に論稿を発表されているのが平岩俊哉氏である(平岩 1996ab・2001・2007)。

平岩氏は古墳時代における集落内祭祀を、土器の

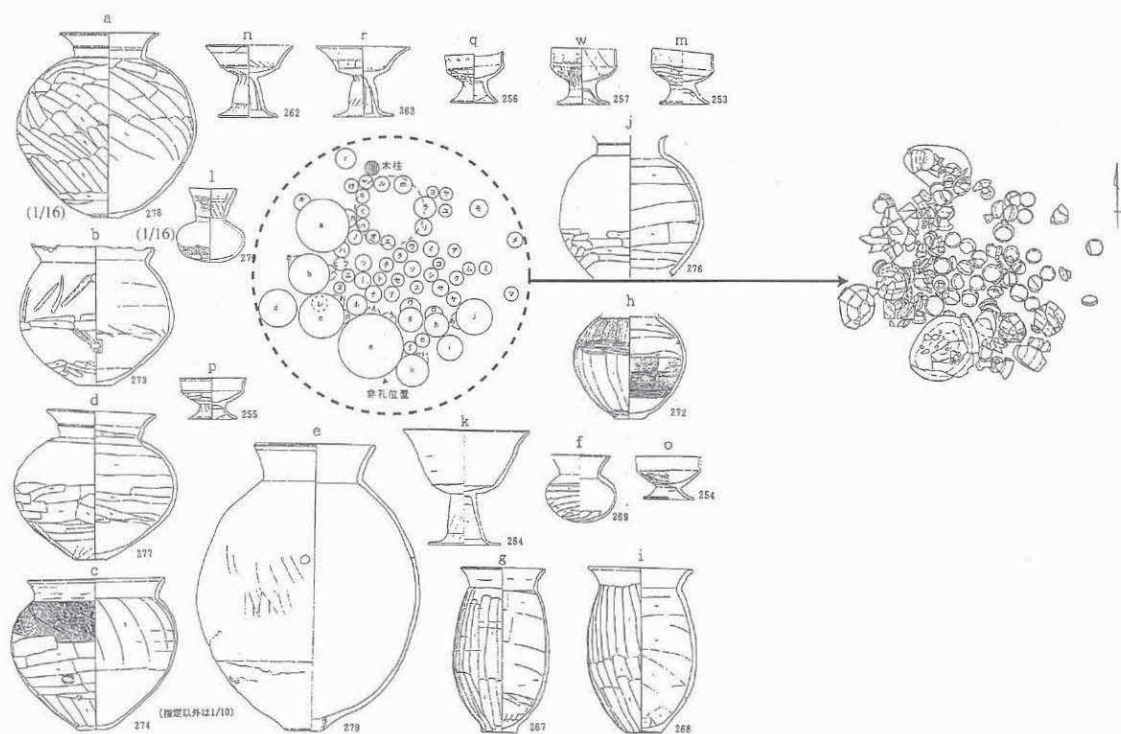


図 4 城北遺跡 (S = 1/60、土器は指定外以外、S = 1/10)

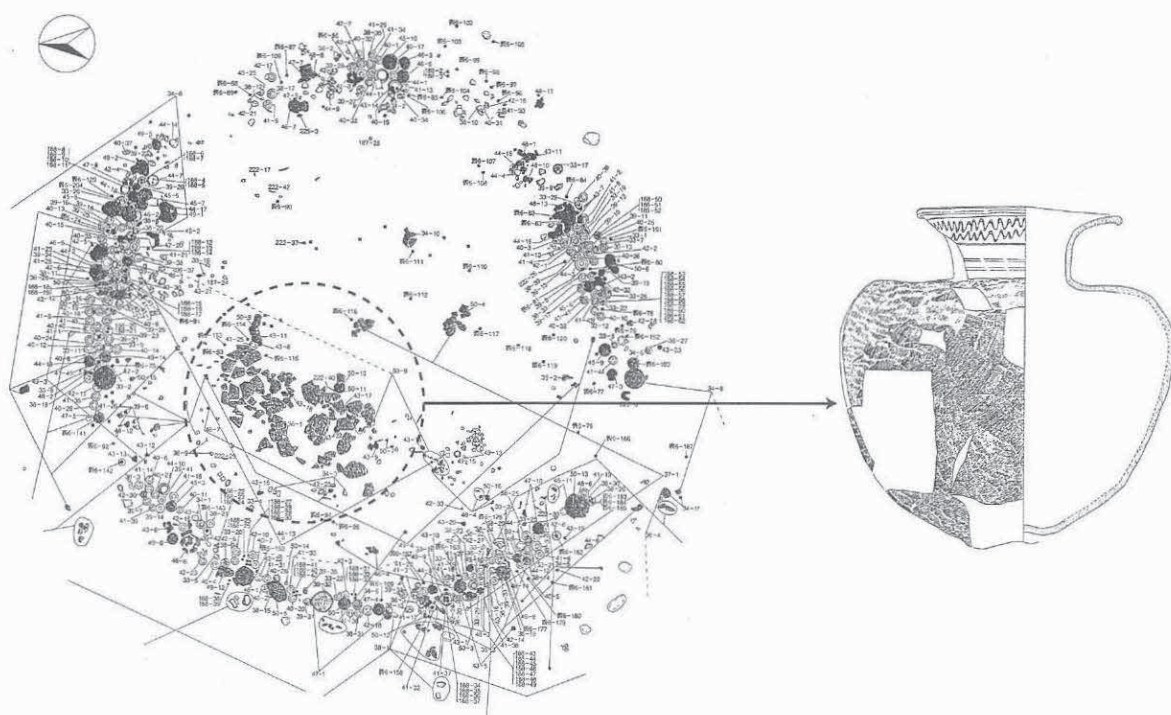


図 5 青木下遺跡 II (S = 1/120、須恵器は S = 1/20)

出土状況に主眼を置き、土器を中心とした器物の埋納型（土壙型）、集積型、散布（散在）型、配列型の4つに分類された（平岩 1996a）。後3者が主に、小論でいう土器集積に該当する⁽²⁾。

そして、平岩氏は集積型と配列型について、類似した性格を想定した。すなわち、両類型は土器が集積されるか（集積型）、配列されるか（配列型）の違いはあるものの、土器をはじめとした器物が、そのまま地表面に残されることでは共通する。

よって、平岩氏は祭祀に使用された土器や、各種器物が「祭祀終了後もその場所に「存在」することが大切だった」（平岩 1996a,p33）と想定したのである。

さらに、群馬県上井出遺跡（清水 1992）から検出された土器集積の事例において、時間をまたがった土器の集積行為が確認できることから、祭祀を執行了した集団が、祭祀を行なった場所を、その後も信仰の場所として認知するために、祭祀終了後に、祭祀に使用した土器類を集積した結果、集積型・配列型などの祭祀遺構が形成されたと結論づけた（平岩 1996b）。

加えて、平岩氏は土器集積の存在から、そこに祭場の固定化が見出せるとし、それは後の神社建築に繋がるものとも論じている（平岩 1996b）。

前章において、遺構の形成された当時に目視可能な状態で、かつ外部に残された土器群であることを、土器集積の大前提として挙げたが、それは以上までに見た平岩氏の優れた分析・考察に依るものである。

また、平岩氏はその後の研究において、「5世紀から6世紀にかけての古墳時代の祭祀において甕と坏を中心とした集積ないし、配列の形態が普及しつつあった」（平岩 2001,p.288）と指摘し、その背景として「集積型ないし配列型の祭祀形態が一般化することとは、古墳時代の人にとって、信仰の対象としての「カミ」への認識が明確化すると共に祭祀の方法が整備・定型化の方向に進んでいたことを示すもの」（平岩 2001,p.229）と論じ、非常に重要な提言を行なっている。

なお、土壙型についても、土壙内に入れられた土器が土で完全に覆われず、その状況が露出していたものについては、集積型、配列型などと同じ意味が考えられるとしている（平岩 1996b）。

他にも、平岩氏は上記した型の祭祀遺構は、古墳

時代の集落に普遍的なものでないことから、「住居内での祭祀の対応範囲を超えた場合、集落全体の大事を解決する際に行われた祭祀の跡として捉えるべき」とも述べている（平岩 2001,p.218）。

最近では、鶴間正明氏が関東を中心とした土器集積の事例の検討を行なう中で、土器集積に石製模造品が伴うのは畿内政権の影響としつつも、祭祀において土器を多量に使用する行為は関東的なものと指摘し、土器集積型の祭祀は、関東から各地へ拡散したと論じた（鶴間 2007）。しかし、その根拠については示されていない。なお、前坂尚志氏は、土器集積型の祭祀が畿内から各地へ発信されたとする論を紹介されているが（前坂 2006）、その出典は不明である。この点については、鈴木敏弘氏が東京都赤羽台遺跡八幡神社地区から検出された土器集積⁽³⁾の考察の中で、同遺跡における土器集積を残した集団を、伊勢湾沿岸部の地域を中心とした、東海西部地域からの移住者集団としており（鈴木 1991）、土器を大量に使用する祭祀の系譜を、関東以西の地域に求めている。

他に注目できる研究としては、古屋紀之氏のそれが挙げられる。古屋氏は古墳出土の土器の分析をされる中で、土器集積についても触れられ、両者に共通した側面があることを指摘した（古屋 2008）。非常に示唆に富む内容であり、傾聴に値する。

以上、土器集積における研究史の概略を述べた。

以下に、近年の報告例を中心に、可能性も含めて、土器集積の事例、及び関連する事例を採り上げ、紹介並びに検討を行なう。

なお、小論では平岩氏のように、土器集積に対し、集積型、配列型といった分類は現状では行なわない。それは、その区分が困難な事例が存在するからであり、混乱を避けるためにも、土器の出土状況や、土器の出土量の多寡に関わらず、全てを「集積」の語で表現する。

3. 事例の検討

本章では可能性を含めて、土器集積及び、関連すると思われる事例の紹介並びに検討を行なう。

なお、出土状況などの説明は、報文に依る箇所が大きいが、文責は全て筆者にある。また、遺構の時期並びに、土器形式に関する呼称は基本的に報文に従う。

(1) 土器集積の事例

① 福岡県堅粕遺跡・87号遺構（福岡市 1999）

集落と墓域の境界付近から、土器が並んだ状態で出土した。平岩氏のいう「配列型」に該当する。時期は古墳時代前期後半である。器種構成は土師器蛸壺1点、同小型丸底壺1点、同壺1点、同高杯1点からなる。滑石製剣形模造品1点、滑石製勾玉1点、滑石製管玉162点、白玉472点、砥石1点が共伴する。

出土状況を見ると、蛸壺、小型丸底壺、高杯、壺の順に、土器が直線的に並ぶ。玉類は壺の内外から集中的に出土している。報告者は、地面に刺し立てられた柵に玉類を掛け、その周囲に壺類をはじめとした土器類を、列状に集積した姿を復元している。

なお、剣形模造品は、土器列端に位置する蛸壺脇から出土した。

② 福岡県蜷住古立遺跡（田村 2007・図6）

集落縁辺部と予想されている箇所から土器集積が検出された。時期は古墳時代中期初頭である。器種構成は、土師器甕5点、同高杯14点、同鉢4点、同直口壺11点、同長頸壺4点、同広口壺3点、同小型丸底鉢6点、同広口小型丸底壺（製塩土器か）10点からなる。手捏土器86点、白玉419点、有孔

円板1点、有孔方板1点、琥珀製小玉1点が共伴する。

なお、図面上では集積の下部に浅い掘り込みが認められるが、これは、発掘調査において、遺物の出土範囲を追っていった結果のものである。

集積範囲は約2.3m×1.4mであり、平面形は不整楕円形を呈する。集積密度は高い。土器は基本的に正位で置かれているが、中には、正位に置かれた小型丸底壺に、手捏土器が入り子状、もしくは、合わせ口状態で重ねられているものもある。さらに、後者の一部には、小型丸底壺の中に、安山岩質凝灰岩の破片を納めているものもある。

集積状況を見ると、遺構の南端付近に、甕5点が北東方向から南西方向に一直列に並び、その西側を中心に壺や鉢、高杯が配置されている。壺は遺構中央付近に多く、高杯、鉢は壺を東西から挟むように置かれている。そして、それら土器の隙間を埋めるように、手捏土器が遺構中央付近に集中して配置されている。なお、高杯3点が集積より約1m北東側に離れた個所から出土している。

白玉は集積部中央付近からまとまって出土した。白玉の一部は、土器群下から出土しているものもあり、土器の集積する前に白玉が散布された可能性もある。

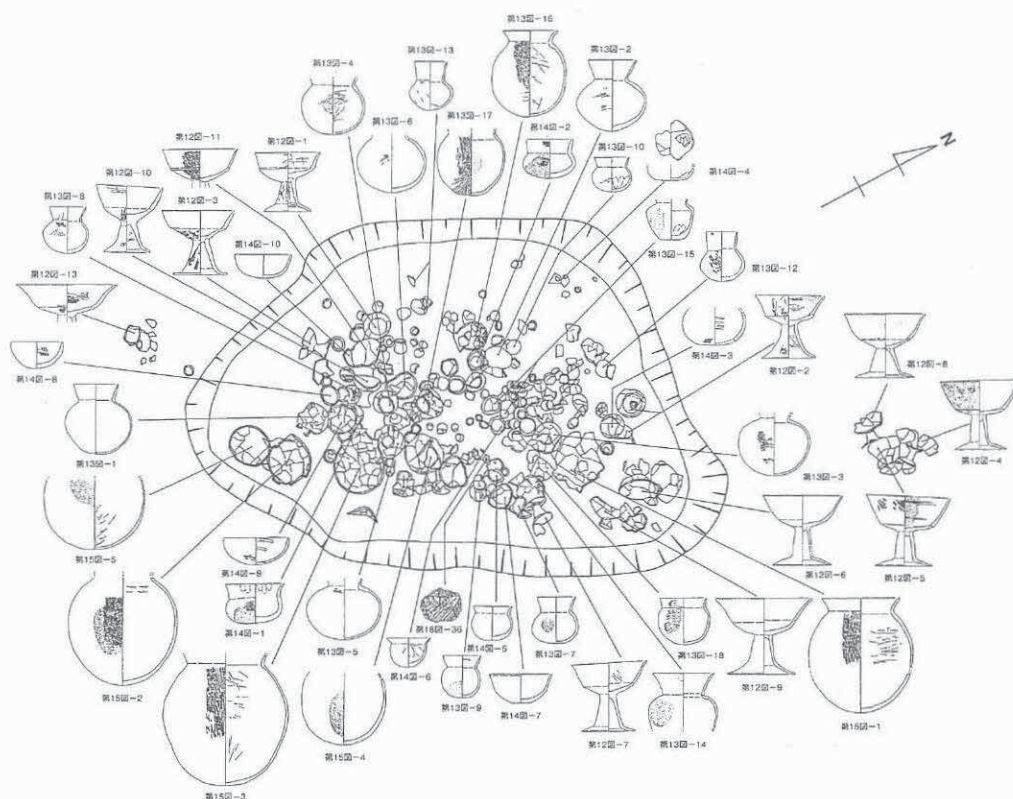


図6 蜷住古立遺跡（S = 1/40）

③ 和歌山県井辺遺跡（和歌山市教 1965・図 7）

土器が東西方向に、帯状に集積された状態で出土した。平岩氏のいう「配列型」である。集積場所は、集落内とされている。現状で、南北にそれぞれ 1 列ずつある。時期は弥生時代後期後半である。器種構成は甕、壺、鉢、高杯などからなり、その内、甕が全体の 40% を占める。出土量は復元できた個体が 50 点、底部の破片が 100 点あり、その他、段ボール箱（ミカン箱・本文ママ）8 箱分ある。

北側の列は長約 5 m、幅約 0.5 m である。現状で、平面形は直線を呈する。A 区では甕に交じり、高杯が多い。B 区は完形の甕が多量に出土している。

南側の列は長約 9 m、幅約 0.5 m である。なお、土器列の途中で 2 ヲ所、土器の密度が低い箇所があり、都合 3 つのブロックに分けられている。現状で土器列は、B 区から C 区までの東西約 6 m は直線的に伸び、D 区を境に、南西方向に緩やかに曲がる。

B 区は甕、壺を中心とした土器からなる。C 区も B 区同様に甕、壺が中心である。D 区は、B 区と C 区が比較的多くの完形土器を含んでいるのとは対照的に、破片が主体である。器種は甕、壺、鉢、高杯からなり、それら土器の破片が、厚いところで約 15 cm 堆積している。

④ 奈良県西河内堂田遺跡（前坂 2006）

土器集積は竪穴建物が廃絶された後、5cm ～ 50cm ほど埋没してできた皿状の窪地上から検出された。遺跡の立地や遺物の散布状況から、土器集積

が検出された場所は、当時における集落の縁辺部であったことが予想されている。時期は古墳時代中期後半である。

集積範囲は約 1.5 m × 1.2 m であり、さらに、調査区外に伸びる。集積の厚さは約 5 cm ～ 20 cm であり、集積密度は高い。集積状況を見ると、窪地の上に拳大より小さめの礫が、約 2.1 m × 1.8 m 以上の範囲で円形状に敷かれており、その上に、完形の土師器甕 20 点が、正位の状態で、礫敷の形に沿う形で隙間なく並べられている。甕の上方には、韓式系土器の平底鉢 4 点と、土師器高杯 20 点以上が積み重なる。

さらに、それらの土器を覆うように、多量の土器片が積み重なっている。また、土器の内部や、礫の間から、有孔円板 1 点、白玉 107 点、小型鉄鋌 1 点、鉄製鎌形模造品 1 点が出土している。須恵器は杯や甕の破片が少量出土しているにすぎない。

なお、礫間や、礫の下部からは土師器の破片が多量に出土していることから、同一地点において土器の集積行為が幾度か行なわれていたと考えられている。類例は千葉県千束台遺跡などがある（齋藤 2008）。

⑤ 京都府難波野遺跡・SX200（京都府 2008・図 8）

遺跡は扇状地の縁辺部に立地し、土器集積の検出された場所は浅瀬上と考えられる。集積下部に掘り込みはない。時期は TK208 期（古墳時代中期半ば）である。301 点の土器からなる。組成を見ると、須恵器は高杯 1 点、甕 1 点、碗 1 点の計 3 点のみであ

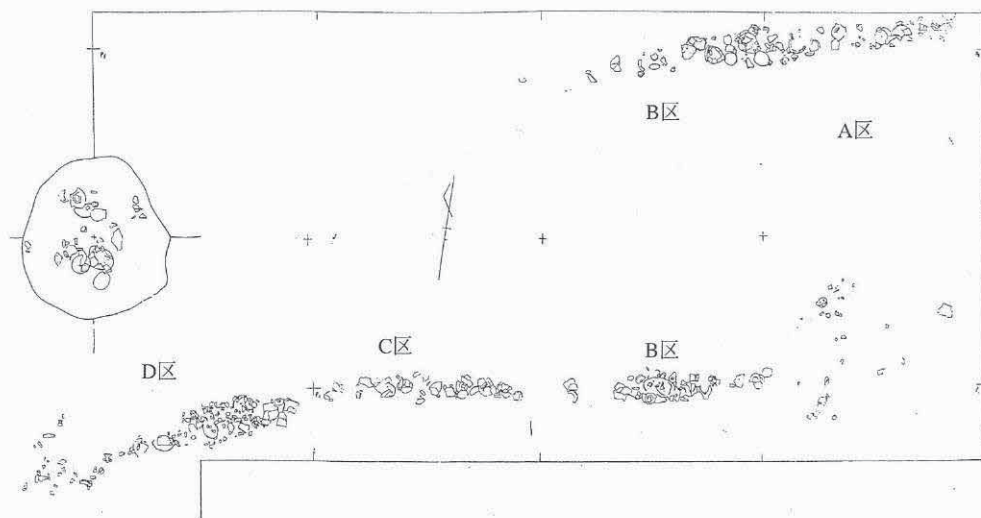


図 7 井辺遺跡 (S = 1/100)

り、土師器は図示されているもので、壺 14 点、甕 6 点、埴 7 点、高杯 31 点、碗 17 点、鉢 3 点、甕 1 点などがある。手捏土器 20 点、滑石製勾玉 2 点、有孔円板 2 点、白玉 284 点、滑石剥片 1 点が共伴する。

集積範囲は約 4.5 m × 3.8 m であり、平面形はコの字状を呈し、南側が開口する形となる。集積密度は高い。土器は基本的に正位の状態で置かれている。北西辺には土師器壺、同甕を 4 列ないし 5 列に並べている。それらの中には、土師器高杯に載せられているものもある。この土器列の外側に、他より大きめの土師器甕を 2 個配置している。北東辺には土師器壺、同甕、同高杯、手捏土器などを数列にわたって配している。須恵器は集積内側から出土している。

滑石製品は集積の南東部辺に集中する。

なお、同遺構の南東側から、土師器甕、同碗、同高杯など、計 9 点の土器を直線的に並べた土器列 (SX300) が検出されている。おそらく、平岩氏のいう配列型に該当するものであろう。

⑥ 新潟県野付遺跡 (水澤 2007・図 9)

土器集積は、人為的に溝が掘削された結果、形成された張り出し部 (推定) から検出された。報文では、張り出し部は豪族居館の一部である可能性も指摘されている。集積下部に掘り込みなどはない。時期は古墳時代後期前半である。

器種構成は、図示されているものだけで、土師器

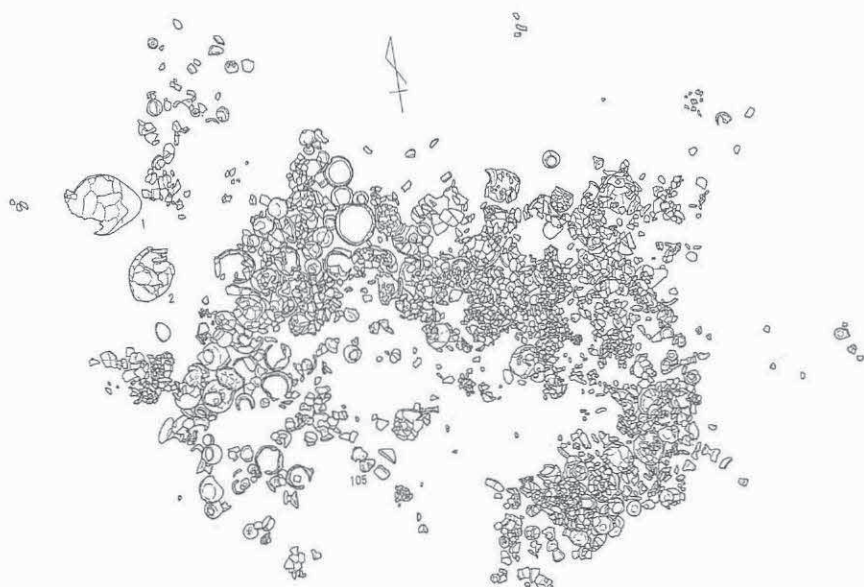


図 8 難波野遺跡 (S = 1/60)

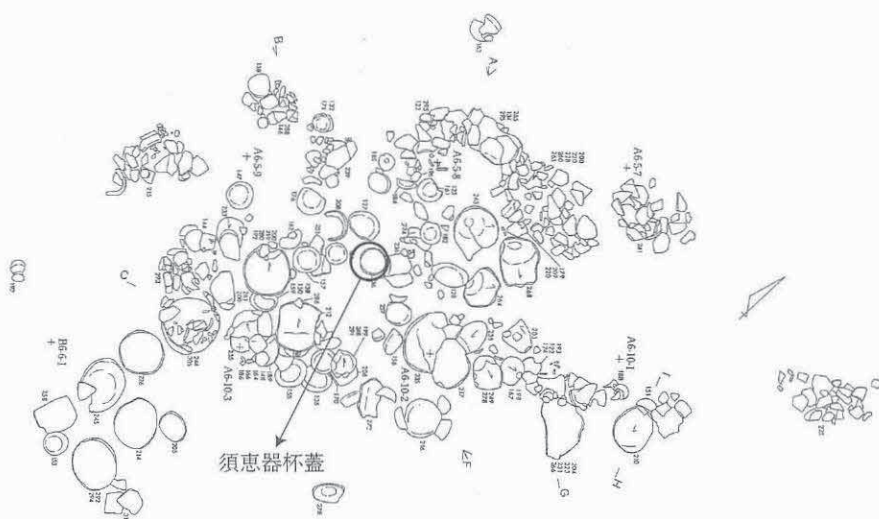


図 9 野付遺跡 (S = 1/40)

釜（壺？）35点（予想されている数は100点以上）、同杯66点、同高杯8点、同鉢3点、同壺2点、須恵器杯蓋4点、同甕1点、同双耳甕1点からなり、土師器の占める率が高い。

集積範囲は約3.5 m×2 mで、さらに、東西方向に延びる可能性が高いことから、平面形は弧状か、L字状を呈していたものと思われる。集積密度は高い。

出土状況を見ると、土器の大半は、正位の状態で置かれている。土器は重ねられることなく、単体で置かれている数の方が多いが、その幾つかにおいて、特異な状態で重ねられているものもある（図2）。

なお、同遺跡の土器集積において須恵器の占める率は低いが、そのような中、須恵器杯蓋1点が、現状で確認できる遺構の中央部から、逆位の状態で出土している。報告者は、杯蓋の上部に釜（壺）を載せていた可能性を指摘している。

(2) 土器集積である可能性が高い事例

① 鹿児島県持鉢松遺跡・土器溜まり（抜水ほか2007・図10）

遺跡は河川下流域の自然堤防上に立地し、土器集積と思われる遺構が検出された個所は、川岸近くである。おそらくは、集落縁辺部と思われる。時期は中津式期（弥生時代終末期～古墳時代初頭）である。器種構成は甕15点、壺27点、鉢10点、蓋2点か

らなり、手捏土器5点、台石1点（半分欠）、凹石1点、砥石1点が共伴する。

集積範囲は約10 m×6.4 mであり、平面形は緩い弧状を呈する。集積密度は低い。甕は全て破片での出土であり、復元率も低い。破壊行為の有無などは不明である。一方、手捏土器全てと、壺10点、鉢7点は完形で残る。図面で確認する限り、壺は集積西側から南側にかけて、集積の外側に偏り、手捏土器や鉢など小型の土器は、その内側から出土している。

報告者は、出土した土器に完形のものが多くばかりでなく、河川近くからの出土であるにも関わらず、流水作用を受けた結果生じる、器壁の荒れや、断面の磨滅がほとんど認められないことや、県内における類似する事例との比較から、検出された土器群が祭祀遺構である可能性を指摘している。筆者も、報文で報告されているように、土器そのもののあり方に加え、手捏土器が伴うこと、さらに、その遺物の出土状況などからも、土器集積である可能性が高いと考える。

② 愛媛県宮前川北斎院遺跡・津田Ⅱ地区（（財）愛媛県1986）

遺跡は河川下流沿い、川の作用により形成された、標高6 m内外の沖積地に位置する。推定胸高直径



図10 持鉢松遺跡（S = 1/80）

2 m、高さ 20 m 以上と推定されるクスノキの根株が、旧河道の左岸に形成された自然堤防上で検出され、その北側を中心に、総数 2878 点にものぼる土器が出土した。なお、本調査区より北側に約 100 m 離れた I 地区では、同時期の竪穴建物が検出されている。

器種構成は甕 1053 点、壺 260 点、高杯 388 点、鉢 136 点、杯 122 点、碗 81 点、小型三種（小型丸底壺 38 点、鉢 2 点、器台 222 点）、土製支脚 374 点からなり、甕の占める率が高い。なお、土器の中には、山陰系土器（台付杯、鼓形器台 17 点、甕形土器 7 点）、吉備系土器（甕）、東海系土器（手焙り形土器 5 点）など、外来系のものも多数出土している。他に、手捏土器 61 点、土製勾玉 4 点、占骨が共伴する。

出土土器の時期は、畿内第 V 様式併行期（弥生時代後期）から、庄内 1・2 式（弥生時代終末期）、さらには布留 I 式（古墳時代前期前半）までまたがるが、量としては第 V 様式併行期のものが主体である。

土器は、基本的に調査区全体から満遍なく出土しているが、その中でも密度が高いのは、根株を中心として、南北約 15 m、東に約 5 m、西に約 15 m の範囲内である。特に、根株より西・北側に密集する傾向にあり、5 m × 5 m のグリッド内で、多い所で 288 点、少ない所でも 40 点の土器が出土している。

各器種とも混在した形で出土しており、器種ごとによる厳密な出土位置の違いはないが、壺は根株の周辺および西側に、甕および支脚は、壺より北側に集中する傾向にある。外来系土器、高杯、器台、手捏土器なども根株の周辺からの出土率が高い。土製

勾玉の内 1 点は、根株周辺からの出土であるが、他の 3 点は根株より約 20 m 離れた箇所からの出土である。

当遺構では、上述したように、甕と支脚が多数出土しているばかりでなく、それら土器の外面に煮沸の痕跡が認められること、さらに、遺構の近辺に建物跡が検出されていないことなどから、遺構周辺の屋外において、煮炊きが行なわれたことが予想されている。

そして、巨木の周辺に土器型式にして、数十年間にまたがる土器が混在して出土しているにも関わらず、厳密ではないものの、器種の違いにより出土位置が異なる傾向にあることが、一定程度確認できることなどから、使用された甕、支脚をはじめとした土器類が、巨木周辺に単に捨てられたとは考え難く、使用後に人為的に集積された姿が復元できる。

また、土器に混じり、手捏土器、占骨などの祭祀専用器具を伴うことや、それに加えて、土器群が巨木周辺から検出されていることなどを勘案しても、当遺構は、単に器物が捨てられて形成されたものとは考え難い。おそらくは、巨木が信仰の対象として認識されており、その結果、巨木周辺で煮炊きを伴う飲食儀礼などが一定期間中に数度にわたって行なわれ、そして祭祀終了後に、土器をはじめとした各種器物が集積されたことにより、形成された遺構である可能性が高い（平岩 2001）。

なお、複数時期にまたがる土器の集積行為の痕跡は、既述した西河内堂田遺跡例や、千束台遺跡例など、古墳時代中期の事例でも認められることから、上記の想定は裏付けられよう。

③ 奈良県藤原京右京九条二坊・SX77（平松 2008・図 11）

土坑内から、2 度に及ぶ土器の集積行為の痕跡が検出された。時期は纏向 1 式から庄内 0 式（弥生時代後期後半～末）である。土器の出土量などは現在整理中のため不明であるが、コンテナ約 12 箱（本文ママ）分出土している。組成は壺、甕、高杯、鉢など多岐に及ぶ。注目されるのは、菊川式、欠山式など東海系土器が在地の土器と共伴することである。

土坑の規模は一辺 2.1 m 以上であり、おそらく平面方形になる。深さは約 0.7 m である。断面形は逆

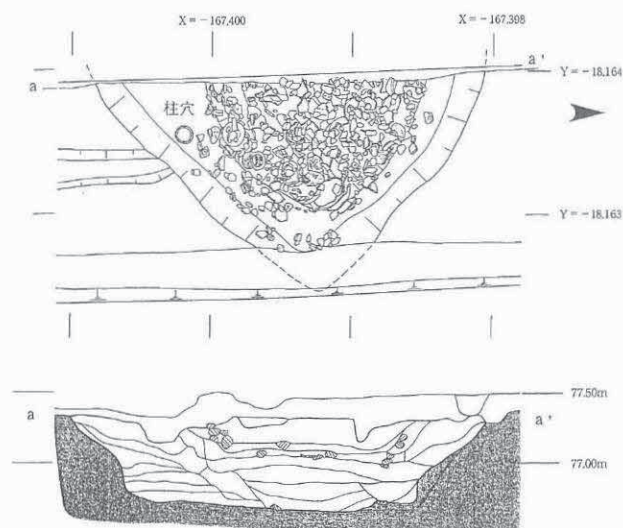


図 11 藤原京右京九条二坊 (S = 1/50)

台形であり、土器の集積は土坑が上面まで一旦埋没した後、底部まで再掘削されてから行なわれている。なお、土坑の隅部に柱穴が2基検出されているが、土器の集積行為と関係するものかどうか、現状で判断はできない。

土坑内の最上部において、小礫を一辺約0.9 m～1.1 mの方形に粗く並べ、その内側に粘土が貼り付けられている、区画を意図した遺構が検出され、土器群はその区画内から確認されている（第1次面）。出土状況を見ると、区画の隅では高杯の上に打ち欠いた壺の上半部を置き、さらに、その上に壺の下半部を重ねたものが確認できる。他にも高杯を逆に伏せた状態で、さらに、その上に別の高杯を正置するものなどがある。

粘土床面の下部からも土器群（第2次面）が確認されている。第1次面のような区画は無く、第1次面ほど明確に、「特異・特殊」な形での土器の集積状況は認められていないが、炭化物や炭化した板材などが共伴する。

概要報告のため詳細は不明であるものの、報文では、土器は土坑内に埋納されていたと理解できる内容で記述されている。残念ながら、土坑断面図に土器群の検出されたレベルが明記されていないため、現状で、土坑内への土器の集積行為が、埋納を目的としていたものか否かの判断はできない。また、1次面と2次面との検出レベルの差などについても不明である。しかしながら、報文では、第1次面に伴う区画は、土坑内部の最上部から検出されたとあり、図面上で最上部と思われる面から、土坑上面までの高低差が僅か20数cmしかないこと、さらに、礫と粘土からなる区画の存在などを考慮すれば、第1次面の土器群が土坑内部に置かれた後、土で完全に覆われたとは想定し難い。

浅い土坑内に土器が露出した状態で集積されていた事例は、古墳時代中期中葉の長野県駒沢新町遺跡1号祭祀遺構例（笹沢1982）や、古墳時代前期初頭の熊本県西片百田遺跡例（上高原ほか2007）などがあり、当遺構もその可能性は十分ある。本報告に期待したい。

④ 新潟県横マクリ遺跡（渡邊ほか2008）

多量の土器片に、滑石を主体とした玉作関連資料

が共伴する遺物集中地点が、約330 m×330 mの範囲内で、計14箇所検出された。報文では、遺物集中ブロックと呼称している。ブロックに伴う遺構は確認されていないが、遺物が集中する地点を中心に、大量の炭化物が検出されているブロックもある。ブロックが検出された地点は、集落縁辺部とされている。時期は布留Ⅱ式併行期（古墳時代前期後半）である。

器種構成は、土師器甕、同壺、同高杯、同器台、同鉢からなるが、甕が全体の8割近くを占める。壺は1割程度であり、残りは他の器種である。出土量はコンテナ46箱（本文ママ）に及ぶので、おそらく数百点あったものと思われる。なお、ブロックに隣接して、自然木の根株が複数地点で検出されている。根株の年代は、6世紀後半から7世紀前半との測定結果がでており、ブロックの時期と異なるが、測定資料は最外年輪から採取したもので、測定値はあくまでも枯死年代を示すものであり、ブロックがそれら自然木を意識して形成された可能性もある。

集積密度、集積範囲は各ブロックにより異なるが、写真から見る限り、全体の傾向として、隙間なく土器が集積されている状況ではない。また、破片での出土が多く、完形での出土は少ないようである。ただ、報文によれば、土器がその場で潰れたような形で出土する事例が多く、さらに、複数のブロック内で、直立あるいは倒立した状態で、焼成後に底部を欠いている土師器甕が、複数個並んだ状態で出土している。

また、同一個体の破片が、異なるブロック内から出土する事例などもある。報告者は、接合関係にある土器の各部位が、不規則に分布するのではなく、特定の部位が偏在して出土することから、自然の営為による破片の移動ではなく、人為的な破壊行為に伴うものと想定している。

なお、14あるブロックの内、12箇所で玉作関係の資料が共伴している。約90%を滑石の剥片で占めている。製品は滑石製勾玉、同管玉、同白玉、緑色凝灰岩製管玉などがあるが、出土量は非常に少ない。報告者は、ブロック内で玉生産が行なわれていたとしている。

本例は、土器群の検出位置、及び土器の出土状況などから、土器集積の1例と思われるが、玉作関係

の資料の位置づけについては今後の課題としたい。

(3) 土器集積と関連する事例

① 長野県吉田古屋敷遺跡・SB25（宿野ほか 2008・図 12）

竪穴建物（SB25）の北西隅部の床面上から、土器が帯状に集積された状態で出土した。時期は古墳時代中期末から後期初頭頃である。器種構成は、土師器杯 9 点、同鉢 5 点、同甕 4 点、同壺 1 点、同甔 1 点からなる。白玉 1 点、土製管玉 1 点（欠損）、鉄製刀子 1 点（切先と茎を欠損）が共伴する。

土器列の範囲は約 1.25 m × 0.6 m である。土器列は、建物西壁に対し若干斜行しながら、直線的に伸びる。集積法は、杯を重ねた状態で正位に配置しているものや、口縁部から胴部上半のみの土師器甕を逆位に置き、その上に、正位の状態ですべて 2 枚重ねにした杯を載せているものなどが確認でき、そのあり方は「特異」と言える。

土器列の西端付近、土器列から見て南側の建物壁際に底部を欠く、土師器甕が割れた状態で出土している。この甕は土器列を構成する土器と比べると、器高が一番高い。報告者は、この甕を中心に土器列が形成されたものと考えている。

なお、白玉が鉢の内部、土製管玉が鉢の脇から確認されているが、いずれも、口縁部付近のレベルから出土していることから、土器に有機質の蓋があり、

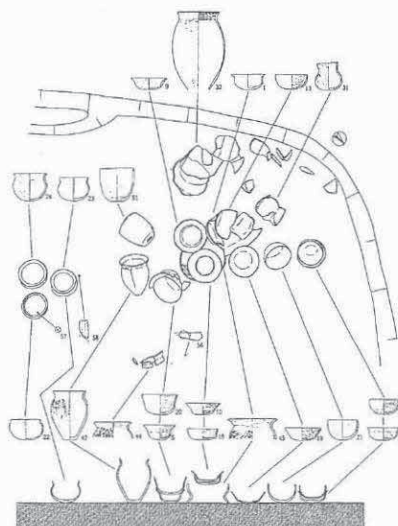


図 12 吉田古屋敷遺跡（S = 1/30）

その上に置かれたか、撒かれたものと想定されている。

② 福岡県東田 11 号墳（岡垣町教 1977・図 13）

東田古墳群の盟主墓であり、墳丘径 16 m の円墳である。時期は古墳時代後期後半である。墳丘盛土内、墳丘頂付近で、多量の土器が集積された状態で検出された。土器の総数は須恵器、土師器合わせて計 293 点に及ぶ。滑石製剣形（?）模造品 1 点、白玉 58 点が共伴する。

器種構成を見ると、須恵器は、杯蓋 95 点、杯身 106 点、高杯 10 点、甕 11 点、提瓶 15 点、壺 10 点、

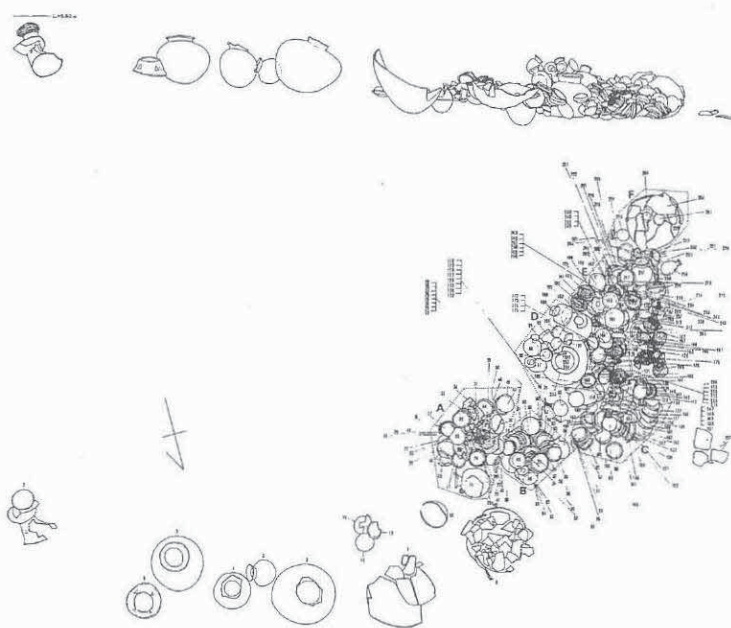


図 13 東田 11 号墳（S = 1/60）

甕 12 点、埴 5 点、脚台付壺 1 点、器台 2 点であり、土師器は高杯 11 点、鉢 10 点、甕 3 点、台付鉢 1 点、直口壺 1 点からなり、須恵器の占める率が高い。

土器群は、墳丘前面（横穴式石室の開口部側）から北半部の 3 分の 2 の範囲内で、約 5.4 m × 3.6 m の広がりを見せ、平面形は弧状を呈する。集積密度は高い。集積の厚さは最大 60 cm である。

集積状況は、大きく 2 群に分けられる。東半部では須恵器脚付壺、同器台、同甕などが径 4 m の範囲内で並び、西半部では、須恵器甕 2 点をはじめ、同蓋杯を中心とした小型品が集積されている。西半部における土器の集積状況は、大きく 7 群に分けることができる。そして各群において、杯身の下に杯蓋を被せるのを一つの単位とし、10 点単位を一まとまりに、2 列～4 列を横に並べる。須恵器甕を中心に左右に土器を集積している状況も見受けられる。なお、須恵器甕の全部と、同壺の幾つかは焼成後の底部への穿孔や、胴下半部への打欠が認められている。穿孔や打欠に伴う破片が出土していないことから、穿孔や打欠をした場所は墳丘外とされている。また、出土した須恵器甕の内、2 点には、その内部に須恵器高杯、同杯が納められていた。高杯の幾つかは意図的に破壊されている。

③ 長野県篠ノ井・高畑 3 号墳（風間ほか 2007・図 14）

墳丘径 13 m の小型の円墳である。時期は古墳時

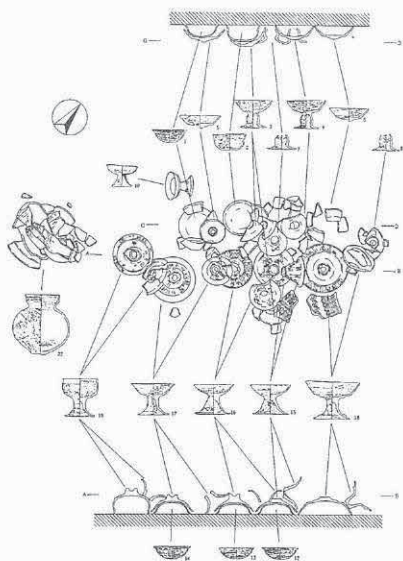


図 14 篠ノ井・高畑 3 号墳 (S = 1/30)

代中期後半である。周溝内の底部に密着する形で、帯状に集積された土器群が検出された⁽⁴⁾。土師器高杯 9 点、同杯 5 点、同壺 1 点、須恵器高杯 1 点からなる。模造品などは無い。

土器列の範囲は約 1.5 m × 0.55 m である。周溝の周回方向に合わせる形で、土師器高杯 9 点が伏せられた状態で南北 2 列に並び、さらに、出土した 9 点の高杯の内、5 点の高杯の杯部内側には逆位になった土師器杯が、入れ子状になる形で納められていた。高杯の脚部はいずれも意図的に破壊されている。土器列西端の北側に、正置されていたと考えられる須恵器高杯が 1 点、また、土器列の西側に土師器壺 1 点が口縁部を下にする形で確認されている。

なお、南北 2 列に分かれて置かれた高杯は、それぞれにおいて器形と、調整法が異なり、混在しない形で集積されている。

4. 小結

以上、可能性を含めて、土器集積の事例及び、関連すると思われる事例について概観した。

以下に、簡単ながら、幾つかの点において、課題と展望を述べてみたい。

(1) 土器集積の出現時期・系譜

既述したように、鶴間氏は土器集積を関東的な祭祀遺構と考えた。しかし、あくまでも筆者の管見に及ぶ範囲であるが、現状での最古例は井辺遺跡例である。また、宮前川北斎院遺跡例、藤原京右京九条二坊例も、土器集積である可能性が高い。よって、系譜の問題については、今一度検討する必要がある。

さらに、土器集積は古墳時代中期・後期に盛行する祭祀遺構とされるが（平岩 2001、鶴間 2007）、現在まで客観的なデータの提示はない。今回、弥生時代後期の事例をはじめ、可能性を含めて、古墳時代前期における事例の存在が判明した⁽⁵⁾。この点については、今後とも集成作業を行なうなかで、実態を明らかにしたい。

系譜の問題に関して、同一遺跡内における他の縦穴建物出土の土器と比較して、その覆土中から大量の土器が廃棄された状態で出土する事例がある。この場合の大量とは相対的なものであるが、いずれにしても一軒の縦穴建物で、日常生活に必要な土器の

量を凌駕していると思われる事例を指す。この問題に関する研究は高梨修氏のそれが詳しい（高梨1986）。

高梨氏は関東における、上記した特徴を持つ竪穴建物の事例を検討し、①古墳時代前期から平安時代まで確認され、古墳時代に多いこと、②出土する土器群は遺構内全体に万遍なく分布することは少なく、平面・垂直分布において纏まりを示す。また、大型破片がブロック上に密集して偏在した分布を示す事例が多いことなどから、出土する土器群は「一括廃棄」されたものであること、③外来系土器を伴う事例が多いこと、④同一遺跡内において、複数の事例が存在することは希であることから、「大量廃棄」という行為は非継続的なものであること、⑤特定地域における複数の遺跡を見渡しても、普遍的な存在ではないこと、などを明らかにした。高梨氏は大量の土器が、一括して竪穴建物跡の窪地に廃棄される前段階に、神人共食儀礼などの祭祀行為を想定している。

土器集積においても、竪穴建物廃絶後にできた窪地を利用して形成されている事例が各地で認められること、集積される土器の数には多寡はあるものの、多くの場合において数十点以上の土器から形成されていること、弥生時代、古墳時代の遺跡において普遍的な事例ではないことなどが認められることから、両者には類似点が多い。両者の違いは、土器を廃棄するか、配置するかの違いである。

大量廃棄された土器群を、祭祀行為と関連づけ

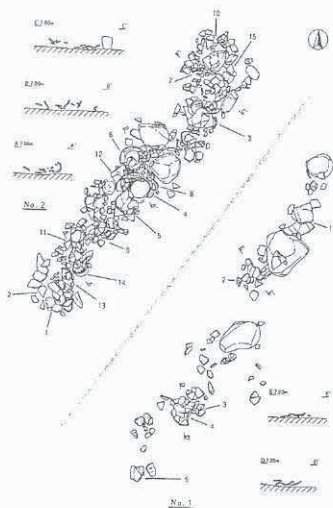


図 15 池子遺跡群 No.1-D 地点 (S = 1/50)

ることに対しては慎重な意見もあるが（石丸2003）、両者を比較検討することは両遺構の性格を考察する上で肝要であろう。

なお、既述した特徴を持つ竪穴建物は、和歌山県旧吉備中学校校庭遺跡（川口ほか2008）など、関東以西の地域においても確認できる。当遺跡例の時期は弥生時代後期中葉であり、高梨氏が採り上げた関東の事例よりも遡る。無論、関東の事例も今後集成をしていくなかで、その出現時期を検討していく必要があるが、高梨氏が明らかにしたように、関東における竪穴建物の覆土中から大量の土器が出土する場合、外来系土器を含む事例の多いことは注目できる。

竪穴建物跡の窪地に大量の土器を廃棄するという行為の系譜が、関東以西の地域に辿れる可能性が想定でき、これはまた、土器集積の系譜の問題とも関わる可能性がある。

ところで、現状で井辺遺跡例は、平岩氏の言うところの「配列型」の初現例となる。すなわち、土器が帯状に集積されているものである。本遺跡例を「帯状集積型」と仮称するが、類例は既述した堅粕遺跡例をはじめ、神奈川県池子遺跡群 No.1-D 地点例（梶淵ほか1995・図15）、や、千葉県日秀西遺跡例（千葉県教1980）などがあり、古墳時代前期後半には、列島の東西で確認されている。詳細は不明ながら、先述した、難波野遺跡でも検出されているという。

上記の点に関連して、吉田古屋敷遺跡例については、竪穴建物内の出土である点において、集落縁辺などの地表面に露出した状態で残された土器集積とは、その性格が異なっていた可能性がある。しかし、いずれにしても土器が帯状に集積された状態で残されている点では、上記した遺跡と共通し、そこに類似したマツリの形を窺うことができる点は看過できない。今後、類例の集成を行なう中で、帯状集積型の事例との比較検討を進めていかななくてはならない⁽⁶⁾。

(2) 土器集積に見られる注目点

平面形が弧状もしくは、コの字状に土器が集積される事例が地域をまたがって確認できる（図8・16・17・18）。管見の限り、そのような事例は古墳時代中期以降のものに限られる。その平面形は偶然

できたものではなく、意図的に形成された可能性が高い（洞口 1998）。今後、その系譜、展開過程、さらには、その形の意味する問題などについて検討する必要がある。

また、土器集積に石製模造品製作の際、生じたとされるチップが共伴する事例が各地で確認できる。



図 16 下芝天神遺跡 (S = 1/160)

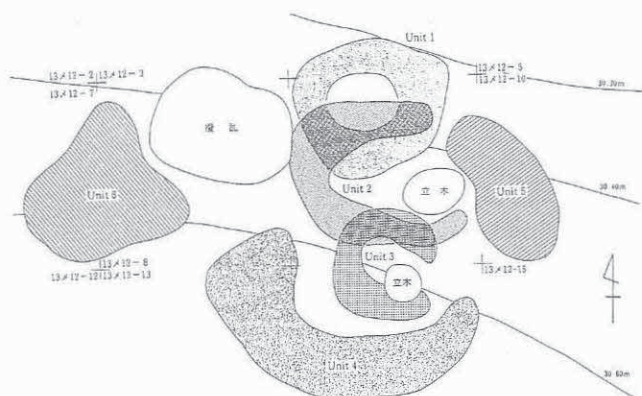


図 17 中岫第 1 遺跡 (S = 1/80、Unit = 土器集積)

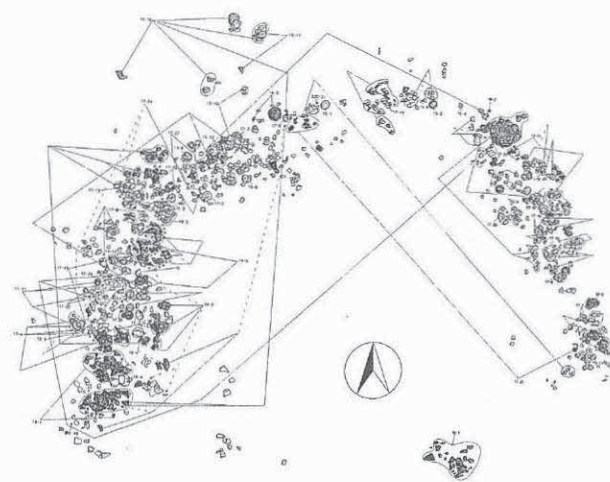


図 18 青木下遺跡 II (S = 1/120)

なかには、土器の中に納められた状態のものもある。チップの共伴という現象からは、おそらくはマツリの直前か、マツリの最中にマツリに使用する石製模造品の一部の最終調整や、製作を行なったことが窺える。しかし、そのいずれにしても、土器を集積するという行為の共通性に加え、いつの段階でマツリに使用する石製模造品を調整・製作したかという、マツリの手順においても、列島の広い地域で共通点があったことを窺わせるものである。

古墳出土の石製模造品においても、最終研磨調整の行なわれていない製品や、剥片に孔を穿ただけの製品など、いわば未製品に近いものが副葬されている事例が地域をまたがって確認できる（拙稿 2008b）。こちらについても、列島各地で共通した意識があったことを想定させると共に、葬と祭の場における石製模造品の製作のあり方に類似性が見受けられる。

なお、今現在、客観的なデータの提示には至らないが、管見の限り、古墳時代の土器集積において、土師器の占める率が高く、須恵器は少ない傾向にあることが確認できる。

須恵器が少ない点については、時期的な問題や、階層性の問題とも関係する必要がある。しかし、畿内型の横穴式石室の成立以降に、石室内への土器の副葬が一般化するが（土生田 1994）、副葬される土器を見ると土師器に比べて、須恵器の占める率が高いことを考えれば、葬と祭の場における土器の使い分けがあった可能性もある⁽⁷⁾。

加えて、土器集積を構成する土器の器種の比率を地域別、時期別に検討する必要がある。これは、土器集積の機能や、地域性を考える上で欠かせない点となる。

上記した点については、今後集成を行なうなかで改めて考えを提示したい。

(3) 葬送にともなうマツリと神マツリとの類似性

東田 11 号墳など古墳上においても、土器の集積行為が確認できた。東田 11 号墳例では、多量の土器を、墳丘構築の最終段階に近い時点で、墳丘内へ集積している。最終的に墳丘内に埋められることから、集積自体に視覚効果がない点において、土器集積とは様相が異なり、その意味するところについて

は検討課題である。

しかし、墳丘内にわざわざ土器を運び、集積するという行為の類似性をここでは重視したい。また、集積の平面形が弧状を呈することも土器集積と類似する。

なお、篠ノ井・高畑3号墳例も、土器を人が故意に帯状に集積する点において、井辺遺跡例などの帯状集積型さらには、吉田古屋敷遺跡例と類似したあり方である。

ところで、須恵器大甕が造出上など、古墳でのマツリで使用され始めるのは中期前半(TK73期)以降からであり、韓半島からの影響があった可能性も指摘されている(高橋1998)。

そして、神マツリの場においても、平岩氏が既に指摘しているように、青木下遺跡Ⅱ例(図5)、千束台遺跡例(図19)など、古墳時代中期以降、須恵器大甕を据え、その周囲に環状に土師器杯、同高杯などを中心とした土器類を集積する事例が各地で認められる(平岩2001)。

加えて、古墳から出土する、マツリに使用された

土器の組成と、土器集積における土器の組成に類似点も見出せる。1例を挙げると、古墳時代中期において、古墳出土の土器と、土器集積を構成する土器には土師器高杯が一定量を占めることが一般的である。土器集積の事例である、長野県水内坐一元神社遺跡SX01(中期後半、青木ほか2006)では、杯部と脚部に段を持つ土師器高杯1点(有段高杯⁽⁸⁾)と、同無段高杯8点が出土している(図20)。古墳の事例では、先述した篠ノ井高畑3号墳を見ると、土師器有段高杯(以下、土師器は略)1点及び無段高杯8点が出土しており、共に高杯のあり方が共通する。

有段高杯と無段高杯の組み合わせは、静岡県文殊堂8号墳(有段1点、無段6点・田村2008)、同宇藤蓮台1号墳(有段1点、無段6点・田村2008)、同林2号墳(有段1点、無段5点・田村2008)、神奈川県上坂東3号墳(有段1点、無段6点・比々多1987)などの古墳や、埼玉県飯積遺跡Ⅰ第79号住居(有段1点、無段5点・鈴木孝2007)などの竪穴建物からも確認できる⁽⁹⁾。

有段高杯はTK73期頃に、東日本の各地で出現す

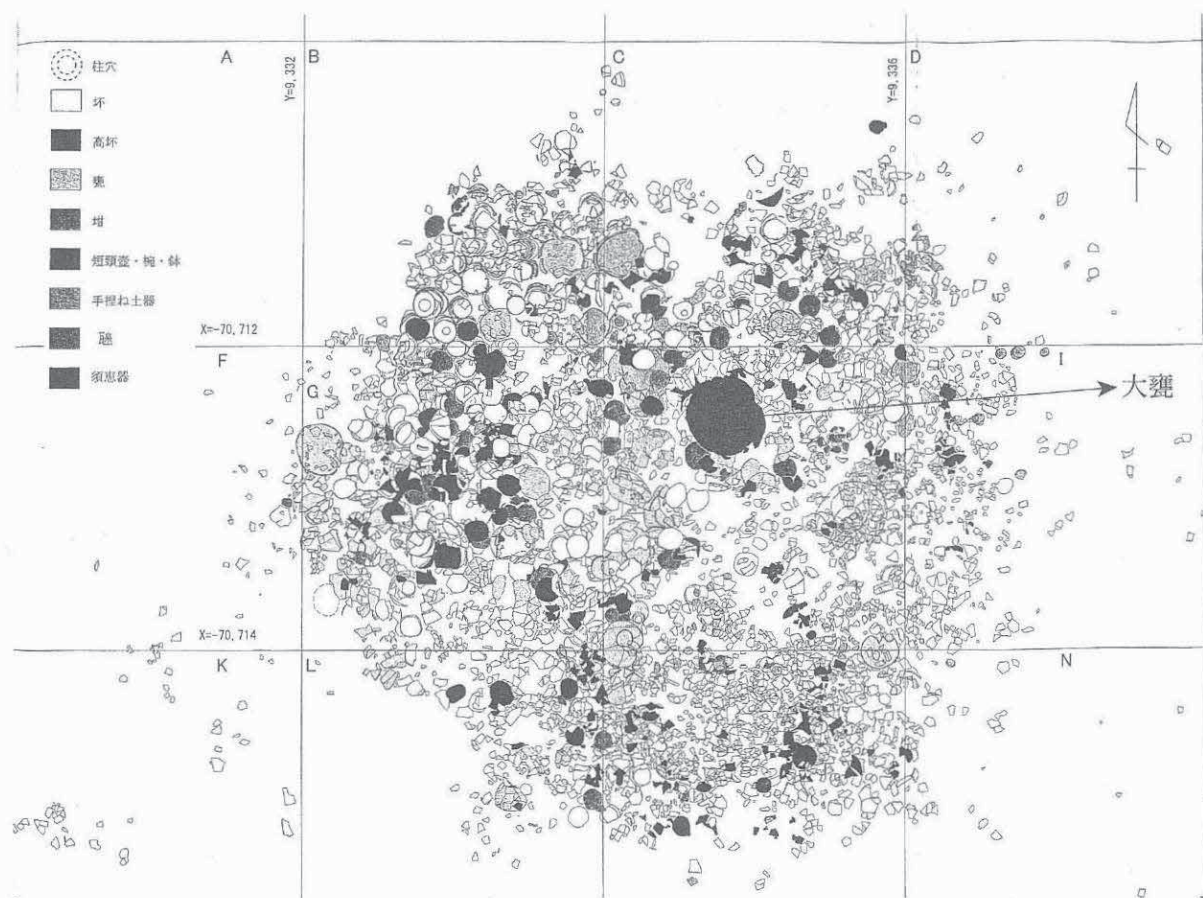


図19 千束台遺跡 (S = 1/50)

る器種である（小沢 1999）。そして、ほぼ同時期に出現するのみでなく、地域をまたがって有段高杯と無段高杯のセットでの使用が認められ、かつ、上記したように、その使用する数にまで類似性が認められることは看過できない。

今後、有段高杯に関する分析は、当期における祭祀のみならず、東日本の社会構造を考える上で重要となろう⁽¹⁰⁾。

上記の点に関連して、田村隆太郎氏は古墳時代中期における古墳出土の土器において、6個体を基本とする土師器高杯群が認められることを指摘している（田村 2008）。先述したように、有段高杯と無段高杯のセットにおいても、6個体から8個体を基本とした数での使用が多く、事例で認められており、有段高杯の問題と相俟って、その系譜、出現時期、展開過程を検討する必要がある。当期は石製模造品が列島各地において普及する時期でもあり、石製模造品との比較研究も重要な課題である。

以上、土器の集積行為、須恵器大甕の重視、組成の類似など、「葬」と「祭」の違いを超えて、考古学的に確認できる「マツリの形」には類似性が確認できる。

また、土師器高杯に認められるように、組成や使用数に関して、地域をまたがった共通点が認められることも判明した。

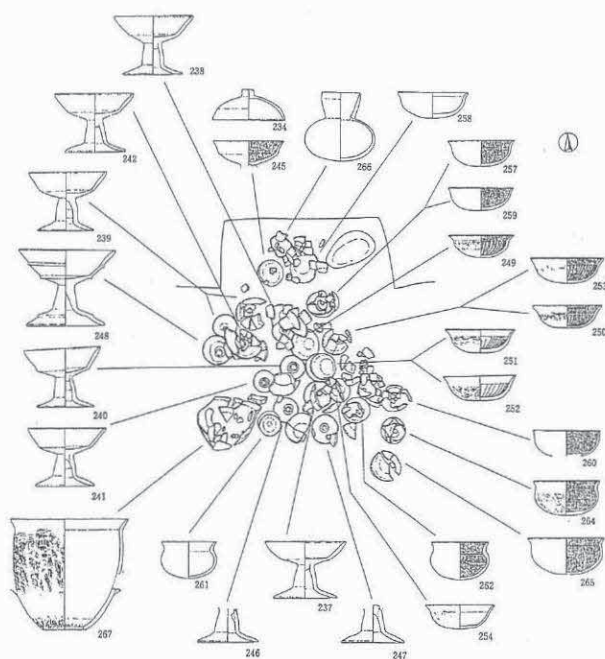


図 20 水内坐一元神社遺跡
(S = 1/160、土器は S = 1/40)

従来、古墳でのマツリと神マツリは別個に検討されることが多かった。さらに、個別地域の枠に収まる研究も多々見受けられる。しかし、古墳時代の祭祀について考える際は、両者の比較検討を行なう必要があることは無論のこと（古屋 2008）、韓半島の事例も視野に入れつつ、列島全体を見渡した研究をしなくてはならない（高橋 1998、中原 2005）。

(4) 祭祀研究における土器集積の意義

従来、土器集積の事例の検討は関東、中部など東日本を中心とした地域に偏る傾向にあり、それだけに、土器集積も東国的な祭祀遺構というイメージが強かった⁽¹¹⁾。

しかし、既述してきたように、近年、関東に限らず列島各地で報告されはじめている。管見に及ぶ限り、北は宮城県から、南は鹿児島県まで、つまり、前方後円墳の波及した範囲内において事例が確認できる。それだけでなく、弥生時代後期から古墳時代終末期までの長期間にわたり認められる祭祀遺構である。

よって、土器集積は共時的、通時的に列島各地における祭祀の展開過程を分析したり、各地域の祭祀を比較検討したりすることができる点において、祭祀研究にとっては欠かせない資料であると思われる。

また、共時的、通時的に、広い地域で確認できる祭祀遺構だからこそ、我国におけるマツリの特質や、そのみでなく、弥生時代、古墳時代における社会を考える上で研究すべき価値があるのは言を俟たない。

しかしながら、平岩俊哉氏の研究を除き、土器集積に関する研究は少ないのが現状であり、未整理の問題が山積みである。

まずは、系譜の追及は無論のこと、土器集積の全国的な事例集成を進め、時期別、地域別の事例数の整理を行ない、土器集積の展開、消滅過程を検討しなければいけない。そのなかで、土器集積において画期となる時期の史的背景の考察や、地域性の有無の検討、さらには、周辺遺跡との比較の中で、土器集積の出現する史的背景を考察するなど、より進んだ内容へと論を進めることが求められる。無論、類型化作業や、土器集積を構成する遺物自体の細かい分析をする中で、マツリの復元を行なうことも重要

な課題である。

また、再三述べているように、古墳におけるマツリとの比較作業も行なう必要があるのは言うまでもない。古墳時代を特徴づけるものは古墳であり、そこには、全てとは言わないまでも、多くの部分において、当時の精神性が反映されているものと思われるのであり、従来の縦割りの研究では本質を見落とす危険性がある。

なお、古墳時代には、その時代内において神観念が変化したと指摘されている（小出 1966、篠原 2005 など）。篠原祐一氏は、古墳時代前期における神観念は、モノそのものに神霊を認めるもので、その神霊を帯びるモノに対し祭祀を行なっていたが、中期になると、大陸からの影響で、モノそのものに神霊が宿するという観念から、モノに神が降るという観念の下、モノを司る神の降臨をもって祭祀が執り行なわれるようになったと論じている（篠原 2005）。平岩氏も土器集積が盛行する（とされる）古墳時代中期以降、神観念に変化があったことを想定している（平岩 2001）。近年では、笹生衛氏も古墳時代中期以降において、律令期につながる神観念が形成されはじめたことを指摘している（笹生 2008）。

上記の問題について、未だ筆者は論じる術を持ち合わせていない。しかし、若干思うところを述べれば、土器集積は弥生時代後期以降から確認できることは看過できない。ここで結論を急ぐことは控えたいが、あくまでも、考古学的に確認できるマツリの形に着目すれば、弥生時代後期から古墳時代中期までの間に断絶が無いことは指摘できる。この点についても、土器集積の事例集成並びに分析、そして、葬送儀礼との比較検討などを経た上で、改めて考えたい。

いずれにしても、土器集積の研究は、我が国における神観念の形成や、変革過程を考える際、貴重な情報を与えてくれる可能性があることを最後に述べておく。

5. 結語

今回は事例紹介に紙数の大半を費やし、新たな知見をほとんど明示することができなかった。内容の大部分は、各報告書における考察や、平岩俊哉氏の研究に依るが、祭祀研究における土器集積の意義が

少しでも伝えることができたならば、小論の役割は幾分か果たせたかと思う。

なお、土器集積の認定にあたっては、発掘調査現場での詳細な観察・記録や、その後の整理作業にたよるところが大きい。出土状況はもとより、土器の復元率や、接合関係にある土器片の出土地点なども重要な情報である。

さらに、土器集積は竪穴建物廃絶後の窪地上に形成される事例が多い。竪穴建物の覆土中から出土した土器を「廃棄された土器」、「流れ込みの土器」としてのみ認識し、詳細な記録を取ることなく、一括で取り上げることは控えたほうがよい⁽¹²⁾。

諸条件の中で、発掘、整理に従事しなければいけないことは承知しつつも、できるだけ綿密な調査、報告が行なわれることを願う。土器がまとまって出土した際、「単なる廃棄行為の結果残された土器群」と決めつけてかかることだけは、極力控えるべきである（鈴木 1991, p.98）。当たり前だが、我々に残されている過去の情報は少ない。しかし、少ないからこそ発掘現場、整理作業において、出来るだけの情報を引き出す努力を怠ってはいけないことも、今さら浅学な筆者が指摘するまでもなからう。

残された課題は多いが、一つずつ地道に問題を解決していくことを誓って擱筆の弁としたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、杉山林継先生、吉田恵二先生をはじめとしまして、外岡龍二氏、桐生直彦氏、笹生衛氏、宮本達希氏、櫛原功一氏、増山順一朗氏、高慶秀氏、阿部昭典氏、西野吉論氏、入江俊之氏、石橋宏氏、正木季洋氏、塩谷風季氏からは御教示、ご協力を頂戴致しました。末筆ではありますが、謹んで感謝申し上げます。

注

- (1) 「祭祀遺物」とされているものには、祭祀にも使用されたものと、祭祀のためだけに作られ、使用されたものがある。本論では後者のものを「祭祀専用具」と呼称する。
- (2) 平岩氏は散布型についても、当初、集積型、配列型と類似した性格の祭祀遺構として捉えていたが（1996a）、その後、後二者とは異なる性格を想定したため（平岩 1996b）、筆者と若干、考えが異なる。

- (3) 鈴木氏は「土器集積」の語は使用しておらず、「祭祀址」と呼称しているが、鈴木氏の言う祭祀址（第1号～第3号）は土器集積に該当する。
- (4) 古墳の周溝底面に土器を帯状に集積する事例は、管見の限り静岡県・長野県の中期古墳で確認できる。今後、その系譜、出現時期などを明らかにする必要がある。
- (5) 今回紹介できなかったが、東京都赤羽台遺跡（東北新幹線1990、古屋2004）、静岡県姫宮遺跡（外岡1979）でも古墳時代前期の事例が確認できる。
- (6) この問題については（2008『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡（5）』）の中で、興味深い考察がされている。
- (7) 寺前直人氏は、京都府乙訓地域では、葬送の場において、土師器よりも須恵器を偏重する傾向にあることを明らかにし、さらに、土師器は上位階層の一部においてのみ使用されることも明確にした（寺前2005）。同時に、奈良県奈良盆地東南部地域では、階層の高低に関係なく、古墳において両者が使用されていることから、「葬送儀礼における土師器の消費形態の地域差が、須恵器や土師器に関わる生産と流通の構造に起因している可能性は極めて高い」（p.456）と論じている。よって、単純に土師器と須恵器の使い分けとしてのみ捉えられないことを明記しておくが、いずれにしても、土器集積における土師器と須恵器の比率を時期別、地域別に検討することは、地域社会の構造や、土師器並びに須恵器の意味について考える際、重要となろう。
- (8) 土師器高杯の杯部や脚部に段が認められるものを、有段高杯と仮称する。
- (9) 埼玉県飯積遺跡Ⅰ第79号住居例は、同遺跡内における同時期の住居に比べ、土器の出土量が多いことが特徴である。出土した土器群が祭祀に使用されたか否かは即断できないが、注目できる。
- (10) 古墳時代中期における東日本の土器は、畿内の布留式土器に影響を受けたものであり、斉一性が強いことを特徴とする。該期には東日本において、前方後方墳が衰退し、替わって大型円墳や帆立貝式古墳の築造が増加することからも、従来から指摘されているように、東日本社会に対する倭王権の影響が強まったことは間違いない。そのような中、有段高杯と無段高杯をセットで使用したマツリが広い地域で確認できることは注目できることであり、今後も事例を集成する中で、分析を続けていく必要がある。
- (11) 『季刊考古学』第96号、口絵3頁目（奈良県西河内堂田遺跡）の説明文などに端的に表されている。
- (12) 竪穴建物出土の土器に対する研究については高梨修氏（高梨1986）、桐生直彦氏（桐生1987ab・1989ab・1993ab）、古屋紀之氏（古屋2004）らの優れた研究がある。

参考文献

青木和明ほか2006『小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡』長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター
石丸敦史2003「下野地域における古墳時代前期の土器様相」『法政考古学』30
上高原 聡ほか2007『西片百田遺跡』熊本県教育委員会
内山敏行2005『東谷・中島遺跡群5 立野遺跡』財団法人

人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター1986『宮前川遺跡』岡垣町教育委員会1977『東田古墳群』
小沢 洋1999「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』5 東国土器研究会
小瀨 学ほか2008『西肥留遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
風間栄一ほか2007『篠ノ井遺跡群（6）』長野市教育委員会
神谷佳明1998『下芝五反田遺跡—古墳時代編—』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
川口修実ほか2008『旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査報告書』有田川町遺跡調査会
京都府埋蔵文化財調査センター2008『京都府遺跡調査報告集』128
桐生直彦1987a「遺物出土状態の分析に関する覚書」『貝塚』38 物質文化研究会
桐生直彦1987b「竪穴住居址を中心とした遺物出土状態の分類について」『東国史論』2 群馬考古学研究会
桐生直彦1989a「住居址間土器接合資料の捉え方」『土曜考古』13 土曜考古学研究会
桐生直彦1989b「床面出土遺物の検討（Ⅰ）」『物質文化』52 物質文化研究会
桐生直彦1993a「甑の特異な出土状態について」『東国史論』8 群馬県考古学研究会
桐生直彦1993b「床面出土遺物の検討（Ⅱ）」『物質文化』56 物質文化研究会
小出義治1966「祭祀」『古墳時代』下 河出書房
齋藤礼次郎2008『千束台遺跡』Ⅰ 木更津市教育委員会
笹沢 浩1982「駒沢新町遺跡」『長野県史 考古資料編全1巻（2）』長野県
笹生 衛2008「千葉県の祭祀遺跡と土製模造品」『土製模造品から見た古墳時代の神マツリ』山梨県考古学協会
篠原祐一2005「水辺の祭祀小考」『古代東国の考古学』慶友社
清水 豊1992「群馬県上井出遺跡出土の祭祀遺物」『群馬県考古学手帳』3 群馬土器観会
宿野隆史ほか2008『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡（5）』長野市教育委員会、長野市埋蔵文化財センター
助川朋広2007『南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』坂城町教育委員会
鈴木孝之ほか2007『飯積遺跡Ⅰ』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木敏弘1978a「南伊豆における古墳時代の祭祀遺跡概観」『駿豆考古』20・21号
鈴木敏弘1978b『日詰遺跡』南伊豆町教育委員会
鈴木敏弘1981「集落内祭祀の意義」『神道考古学講座』3（月報）雄山閣
鈴木敏弘1991「集落内祭祀の諸問題」『赤羽台遺跡』東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
高梨 修1986「古代集落の竪穴住居址に大量廃棄された土器群が意味するもの」『法政史論』14 法政大学大学院日本史学会
高橋克壽1998「古墳築造システムの展開」『中期古墳の展

- 開と変革』埋蔵文化財研究会
- 高橋 誠ほか 1998『南羽鳥遺跡群』印旛郡市文化財センター
- 田中大輔 2008a「古墳時代における土器集積について」『伊豆の神仏と國學院の考古学』國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 田中大輔 2008b「古墳時代中期における古墳出土石製模造品の拡散背景」『土製模造品から見た古墳時代の神マツリ』山梨県考古学協会
- 田村和裕 2007『蟹住古立遺跡』（財）北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
- 田村隆太郎編 2008『森町円田丘陵の古墳群』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 田村隆太郎 2008「木棺直葬の土器群と葬送儀礼」『森町円田丘陵の古墳群』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 千葉県教育委員会 1980『千葉県安孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』
- 鶴間正明 2007「祭祀遺構にみる土器集積」『原始・古代日本の祭祀』同成社
- 寺前直人 2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学井ノ内稲荷塚古墳発掘調査団
- 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会調査団編 1990『赤羽台遺跡』
- 外岡龍二 1979『河津郷 姫宮』河津町教育委員会
- 中原 計 2005「古墳時代後期における葬送儀礼の系譜」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学井ノ内稲荷塚古墳発掘調査団
- 抜水茂樹ほか 2007『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 土生田純之 1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版
- 比々多第一地区遺跡調査団 1987『比々多遺跡群（遺構編）』
- 平岩俊哉 1996 a「古墳時代集落祭祀の一考察」『研究紀要』12 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 平岩俊哉 1996 b「古墳時代集落内祭祀小考」『博古研究』12 博古研究会
- 平岩俊哉 2001「古墳時代集落祭祀とその周辺」『日本考古学の基礎研究』
- 平岩俊哉 2007「古墳時代集落内祭祀の成立」『日中交流の考古学』同成社
- 平松良雄 2008「藤原京右京九条二坊」『奈良県遺跡調査概報』奈良県立橿原考古学研究所
- 福岡市教育委員会 1999『堅粕 3』
- 古屋紀之 2004「住居址覆土から出土する土器群の評価について」『文化財研究紀要』17 東京都北区教育委員会
- 古屋紀之 2008「信濃の中期古墳における土器配置の一樣相」『信濃大室横石塚古墳群の研究』III 六一書房
- 洞口正史ほか 1998『下芝天神遺跡・下芝上田屋敷遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 前坂尚志 2006「大和五条の祭祀遺跡」『季刊考古学』96 雄山閣
- 榊淵規彰 1995『池子遺跡群』II 財団法人かながわ考古学財団
- 水澤幸一 2007『天野遺跡 2 次・野付遺跡 2 次』胎内市教育委員会
- 山川守男 1995『城北遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 和歌山市教育委員会 1965『井辺弥生式遺跡発掘調査報告』
- 渡邊裕之ほか 2008『横マクリ遺跡』財団法人埋蔵文化財調査事業団

* 図版は各報告書から引用させて頂きました（一部改）。